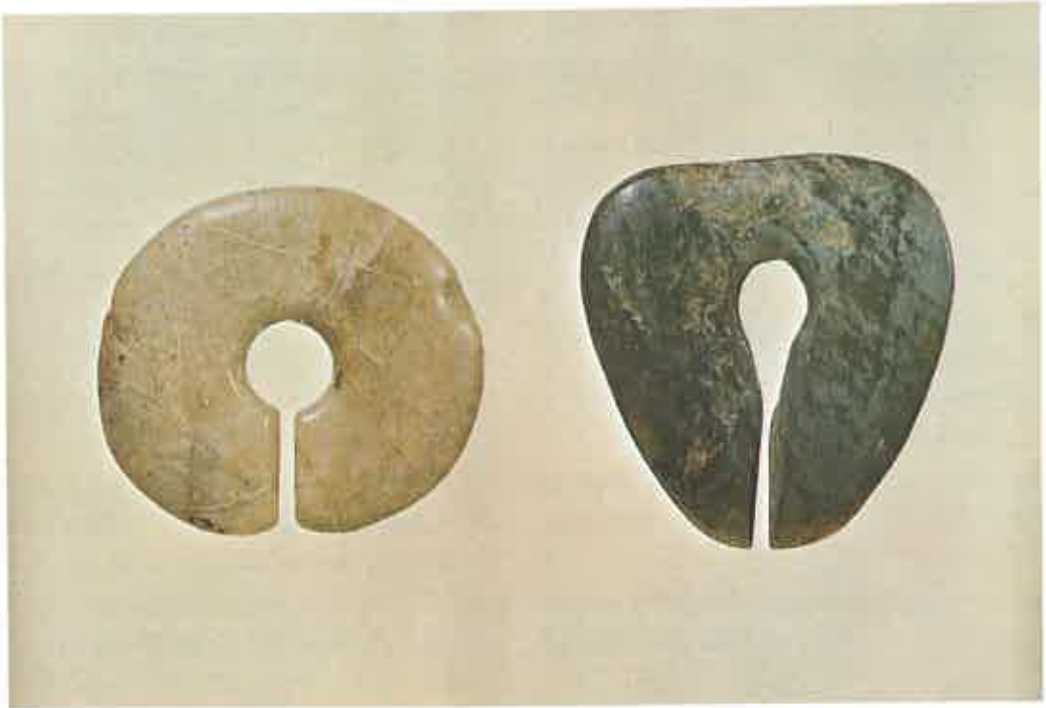


所 陵

No. 3

関西大学考古学等資料室彙報

昭和56年 5 月31日発行



玦状耳飾（重要文化財）

目 次

ヨーロッパの考古学博物館・遺跡で考えたこと……………	2
江口治郎氏寄贈の瓦経片……………	3
本山彦一翁と考古学 その2……………	4
墓壁断片(エジプト メンフィス付近出土)……………	6
刀の手入れ入門……………	7
アンデス地帯出土の土器……………	8
昭和55年度調査報告「岡山県津雲貝塚」……………	10
資料室資料紹介……………	11
編集後記……………	12

ヨーロッパの考古学博物館・遺跡で考えたこと

横 田 健 一

1949年以来、1970年度まで、私は関西大学で一般科目の人類学を22年間受けもってきた。この科目は、一般教育科目の中で自然科学部門の科目数が不足なため、同部門に配属されていたので、前期には自然人類学、後期には文化人類学をやることにした。

前期の自然人類学については、おおむね人類の発生からホモ・サピエンス（現生人類）の出現、さらに新石器時代を経て青銅器時代に至る人類の発達史を中心に講じた。しかし私自身、人体の解剖学や計測学など学んだこともなく、また有名な猿人であるピテカントロプス・エレクトスやシナントロプス・ベキネンシス、あるいは原人であるホモ・ハイデルベルゲンシスやホモ・ネアンデルターレンシスなどといっても、化石人骨の現物はもちろん、模型さえも、最初は見ないで講義をしていた。

東京国立博物館の表慶館にある模型を見てのちは、ようやく概念を得ることができた。

旧石器についても同様であった。日本で旧石器の現物を見ることは、1950年代でもなかなか難しかった。日本のプレ縄文の研究は、ようやくその頃に始まったばかりで、1951年に京大人文科学研究会を会場として行われた日本人類学会、日本民族学会連合大会で相沢忠洋氏が発表展示された岩宿出土石器が私のはじめて見た旧石器だった。

1963年4月に関西大学在外研究員としてヨーロッパに渡った私にとって、行く先々の国々で、その博物館や遺跡を見て歩いて、実際の旧石器をはじめ新石器、また青銅器などの豊富さ、立派さに驚嘆するばかりであった。

羽田空港を4月10日に飛び立ち、4月12・13日をエジプトのカイロ、メンフィス、サッカーラなどを見た。カイロの博物館でみたツォタンカーメンの黄金の宝器がB.C1350年頃といえば、日本はまだ縄文の中期か後期のはじめであろう。ただ嘆息するばかりである。

ラムセス二世の遺跡であるメンフィスやサッカーラの巨大な神殿や像もB.C1320年頃という。呆れるばかり。エジプトのファイムなど出土の旧石器の立派なこと。日本のプレ縄文の石器など、

足もとに寄れない。

4月14日から17日までギリシャのアテネに滞在した。アクロポリスのパルテノンがB.C5世紀といえば、わが縄文末期である。その竪穴住居とくらべれば月とスッポンである。国立アテネ博物館でみたミノア・ミケーネ時代の黄金の器の数々、また赤絵や黒絵の土器の数々も、日本の縄文時代にあたるもの。ただ溜息をして見入った。

ロンドンの大英博物館は6回かかって、やっと一とおり見た。パルテノンの欄間の彫刻群やアッシリアのチャリオットに乗って獅子狩をする広大なレリーフ群など何度見ても飽きなかった。私が愛読したサー・レオナード・ウーリーの『カルデアのウル』(“Ur of the Chaldees” by Sir. Leonard Woolley 1927) にのべられている王妃の胸像や銀のハーブ。絵画入りの手箱、黄金の碗その他の類も胸をときめかせて見た。

大英博物館には、世界中の各国・各民族の古今の遺物がとところ狭しとならんでいた。

それは秋になって赴いたフランス・パリのルーヴル博物館でも同様であった。人類の悠遠の過去からの文明の発達を否応なしに考えさせるものであった。

しかし私が特に足繁く通ったのは、トロカデロにあるシャイヨー宮西翼の2階・3階にある人類学博物館(ミュゼ・ド・ロンム)である。ここへは10回通った。世界の各時代の各民族の製作したおびただしい遺物が並べられていた。旧石器も新石器も金属器も腐るほどあった。人体模型でもホッテントット人のステトビギー(臀部脂肪過多)も外陰脣人工拡大も一目瞭然である。同じトロカデロのギメー東洋美術館もアジア各国の造形美術がおびただしく展示されている。特にフランスが力を入れた東南アジア諸国やアフガニスタン・イラン等のものはすばらしい。

またパリ西郊サンゼルマン、アン、レイの考古博物館はルネサンス時代の宮殿を博物館として使用、旧石器からガロ・ロマン時代、ケルト時代の遺物が豊富である。こうした博物館に終日入り浸っていると、人類の物を造る営み、生活の戦が痛いほど物狂ほしく胸に迫って考えさせられる。

他の国々の博物館についてはまた後に記そう。

江口治郎氏寄贈の瓦経片

網 干 善 教

本年2月9日、箕面市に御在住の江口治郎氏から大庭脩教授を通じて、関西大学考古学資料として瓦経片6点を寄贈して下さることになった。早速その資料について復原調査を行い、次のようなものであることが判明した。

まず6点のうち3点は『妙法蓮華経』、2点は『大毘盧遮那成佛神變加持経』、1点は『金剛頂一切如来真実攝大乘現證大教王経』であった。

さて、『妙法蓮華経』の3点のうち①は全経巻第四の「五百弟子受記品第八」の冒頭の部分の破片、②は全巻「受学無学人記品第九」の偈文の破片、③は全経巻第五の「安樂行品第十四」の偈文の破片である。これは大正新脩大藏経第九巻に収められている「後秦龟兹国三蔵法師鳩摩羅什奉詔訳」と同じ訳経によっている。

次に『大毘盧遮那成佛神變加持経』は『大日経』と称される密教所依の經典であるが、江口氏寄贈の1点は、巻第五の「秘密漫荼羅品第十一」の偈文に相当する破片であることがわかる。もう1点は同じく巻第七の「供養儀式品第三」の破片である。この2片の破片も先きの『法華経』と同様「鳩摩羅什」の訳経によって復原することができる。

最後の一点は『金剛頂一切如来真実撰大乘現證大教王経』略して『金剛頂経』と称している經典を書写したもので、やはり密教所依の經典である。瓦経はその經典の「巻下」の偈文に相当する部分であることが判明した。

以上のように6点の破片を經典と同定することにより、表裏の関係、瓦経1枚に書写された経文の復原を行うことができた。

さて、この瓦経はすべて破片であるが、これを復原することによって、表裏共に15行、1行17字あるいは偈文については5字1句、4句1行、計1行20字で書写されていることが判明する。そして1行がいずれも1.8cmであるから横幅は、両端の周縁各々約1.5cmを加えて、 $1.8 \times 15 + (1.5 \times 2)$ と計算すると約30cmとなる。縦の大きさは5字1句の長さが約5.5cm、上下の周縁各1cmを加えて、5.5



(裏面) (表面)
瓦経「妙法蓮華経」巻第四 ①

$\times 4 + (1 \times 2)$ と計算すると約24cm程度の長方形の原形を想定することができる。

次に今回江口氏より寄贈をうけた瓦経は、昭和42年6月6日関西大学が考古学資料として購入した11点の瓦経片と同じ入手経路である。また両者の書体をみると同一人物の筆跡とみられるものもある。そして先きに購入した瓦経片の經典も『妙法蓮華経』と『大日経』『金剛頂経』『蘇悉地羯羅経』の所謂秘密三経がふくまれていることよりして、恐らく同じ地点から出土したものと考えられ、その推定地は現三重県伊勢市浦口町3丁目9番の地籍にある「伊勢小町塚経塚」で、従来「旦過山」とか「天神山」とも称されてきた瓦経塚である可能性がある。

小町塚出土の瓦経はその紀年銘によって承安四年に、金剛仏子遵西、沙門西観らが勧進となり、度会神主常章、春章らが檀越、度会仙王が女檀那、僧印西、定禪、良中、聖賢らが筆師となり、度会滝寿、荒木町五郎、散位佐伯国新、藤井成重、大中臣氏、伴氏などが参画している。また瓦経の銘文からみる限り、当時三河国渥美郡伊良湖郷万覚寺の僧侶たちが写書に従事したようである。特に重要なのは、「當御厨前領主度会神主常行」や「神主常章」は「称宜」の神官であり、これらが檀越となって大乘顯密の教典を埋納していることは、平安時代後期における神仏習合の一樣相を如実に知ることができる。

本山彦一翁と考古学 ……その2……

角 田 芳 昭

……^こ国府遺跡発掘……

松陰本山彦一翁（1853～1932）は毎日新聞社長として新聞経営及び財界活動のかたわら趣味としての考古学研究にも情熱を傾けた。

大正6年（1917）10月大阪府藤井寺市^こ国府遺跡の発掘、同10年8月山口県長府町における鑄銭址発掘、昭和4年肥前有田附近古陶窯発掘は翁の3大発掘として学史的にも著名なものである。そこで今回は国府遺跡発掘について記してみたい。

国府遺跡は大阪府藤井寺市国府にある先土器、縄文、弥生、古墳時代にいたる複合遺跡で、大和川と石川の合流点で東面した洪積台地の北端に位置する。明治22年（1889）山崎直方氏により学界へ紹介され、最初の学術調査は大正6年京都大学の浜田耕作教授により着手されたが、本山翁がこの遺跡の発掘権を地主より買い取り、学界へ提供し大正9年まで前後9回、当時は調査発掘された。

翁自身も大正6年8月9日～13日（第1回）より同年10月1日～10日（第2回）、大正7年4月11日～5月10日（第3回）、同8年4月8日～（第4回）と発掘調査され、学界に著名な玦状耳飾をはじめ多くの土器、石器、人骨などを発掘し、考古学界を驚かせた。この遺物で昭和10年9月4日に重要美術品等認定資料として指定されたものは次の如くであった。

爪型縄文深鉢形土器…人骨伴出…	1
籠形土器残欠 ……………	1
弥生式土器高杯 ……………	1
石製玦状耳飾…人骨伴出…	5
丸 玉 ……人骨伴出…	1
銅 鏃 ……………	5
丁子頭勾玉 ……………	1

以上の資料は昭和39年5月26日付で最後の丁子頭勾玉を除いて重要文化財へ格上げ指定された。玦状耳飾は他に1点同時発掘資料として1点加わり6点となった。これらの発掘経過及び重文指定経過等については末永雅雄先生が関西大学教育後援会々報に『関西大学の考古学』（昭和50年以降）と題して詳細に述べておられる。また、発掘結果



国府遺跡発掘 第4号人骨模型



玦状耳飾(第4号人骨附着)

の意義が東京日々新聞大正6年11月22日の記事に「学問上大切な事実の提供」として鳥居龍藏先生の講話が掲げている。

「今回の発掘中、考古学上まず第1に言うべきは、数組の石製耳飾であろう。これらの耳飾はあえて今度初めて発見されたとはいえない。これまで関東の石器時代遺跡からも出ている。けれどもそのまさしく頭蓋骨の耳辺にあったのと、数組あったのも珍しい事で学問上最も大切な事実を提供せられたものである。そして之によってこの石製品が全く耳飾に使用された事が確かとなってきた。……以上の耳飾は清兵大教氏『古玉図考』中の『玦』に類似していることは、浜寺到着早そうから直ちに本山社長から承った所であるが、いかにもその形状とよく似ている。」

本山翁については浜田耕作教授が史前学雑誌

(第5巻第1号)に次のように語られている。…私が本山翁に親しく接したのは明治45年の秋、宮崎県西都原の古墳の発掘に参加した時であった。此の時翁は東野君を同伴して西都原に赴かれ、両3日間同じ宿屋に起臥したこともあったが、当時は翁としては未だ60才前後の壮令であって元気仲々盛んに発掘半ばにして他へ出かけられた。……国府遺跡の発掘は、我が国先史考古学界の一転機をなした大事件であって、本山翁は殆ど全国の斯学者を総動員して、小金井、鳥居、長谷部、清野、大串等の諸博士が之に従事する機会を与えられたのであり、翁の学術上の功績は、実に此の国府遺跡の名と共に翁の題字の記念碑に勒せられて、永久に学界に忘れられぬ所であろう。この発掘は諸々な意味において重大な意義を持つものであった。

写真は、大正6年10月3日発掘の第4号人骨であり(石コウ模型)下はその両側の耳に附着していた玦状耳飾である。右の材質は近年の科学的調査結果により蛇紋岩と判明、径5.2cmである。左は砂岩質凝灰岩と思われるが人工的焼物とも見られる。径5.1cmである。表紙の耳飾は大正7年4月発掘の第18号人骨に附着していたものである。材質は左図が半透明の非晶質石灰岩(大理石と同質)であり、縦径4.5cm、横径5.1cmである。右図は緑色の蛇紋岩であり、縦径5.1cm、横径4.9cmで両方とも美しく研磨されており縄文前期(北白川下層2式)の資料である。下図右の玦状耳飾は半透明白色の非晶質石灰岩(大理石と同質)で縦径4.1cm、横径3.9cmである。左は砂岩質凝灰岩と思われるが、人工的焼物との区別が肉眼ではつけがたい(谷口敬

一郎工学部教授)とする。いずれも第12号人骨に附属していたものである。中央にあるのが石製丸玉で、径2.27cmで灰白色である。銅鏃は5点で弥生時代に属するものであり、大正6年10月2点、同7年4月3点を発掘したもので、有柄と柳葉形がある。爪形紋土器は、大串氏発掘第3号人骨の胸上にあつたもので、右耳に現在は不明であるが玦状耳飾が着装されていた。二つの波状部をもつ波状口縁の鉢で、胴部下半に爪形文帯をめぐらし、上半に羽状縄文を付している。爪形文帯は5条あり、すべてC字型で右廻りにつけている。この出土により従来不明であつた玦状耳飾の使用時期が確定したのであり、縄文前期(北白川下層2b式)の資料である。

この他本学には一括して国府出土資料があり、特に弥生時代の甕形、壺形、鉢形、高杯などの土器が当時の発掘されたまま、リンゴ箱につめこまれ、保存されている。この数50箱はあろうか。これら資料を現在綱干教授の指導のもとに大学院生を中心とする学生諸君で整理されており、近々学術報告書として発刊される予定である。整理、研究中活発な討論となることがあるが、この膨大な資料を前に大学般入にご苦労された方々の努力に頭が下がる。今後はこの資料を中心に整理を行ない、教育に研究に、また大学の考古学研究の充実をはかっていきたい。次回は本山翁の古陶窯発掘と鋳銭址発掘について述べたい。



昭和二年建之



銅 鏃



玦状耳飾 丸 玉



縄文土器 (爪形文土器)

角棒状の石灰岩断片である。写真のように、1つの面にだけヒエログリフ（古代エジプトの象形文字）が横書に1行刻まれている。筆者はおもにこのヒエログリフについて解説を試みたい。

磨滅した部分もあるが、文意は明瞭で、死者に捧げる供養文の1節、それも書き出しの部分である。中央にヘテブ（またはホテブ、供物の意）という語があり、それを文頭語として左右対照的に同種の2文、左→右横書の文（以下右文と略す）と右→左横書の文（以下左文と略す）とが刻まれている。ヘテブ (hetep, よりげんみつにはhtp) の綴りには細工がほどこされている。pの音を表わす文字□の両わきにt△が刻まれているのである。このことは、この語を右向きにも左向きにも読ませるようにしていると同時に、この中央の語そのものを左右対称図形にして美的効果をねらっているものである。ヒエログリフは文字であるとともに絵でもあるので、とりわけ碑銘ではこのような芸術的構成のなされることが多い。

写真のように、右文はほぼ原形をとどめており、左文は欠所が多い。右文の近似的な発音は「ヘテブ・ディ・ネスウ・ウシル・ケンティアメニト・ネチュルアア・ネブ」で意味は「王が、西方の第一のもの・大神・〔?〕の主であるオシリス神に与える供物」である。この〔?〕には、左文の末尾語でもある「アビドス」を補って間違いないと思う。オシリスとは「オシリス神話」でよく知られている神で、冥界の王、死者の神である。アビドスは同神の聖地である。ケンティアメニト（西方の第一のもの）は通常ケンティアメンティウ（西方人の第一のもの）と綴るのであるが、これも神名で、やはりアビドスを聖地とする古い冥界の神であった。冥界の神がこのような名をもつのは、エジプトの西方浄土的な思想に由来している。この神の属性は早くにオシリス神の神格の中に吸収された。

この種の供養文のととのった形式は「王がオシ

リス神に与える供物。それによってオシリス神は死者某のカァ（霊）にこれこれのものを与える」というものである。供養文のもとになっている思想は「死者への供物はすべて王→オシリス神→死者のカァという順序で与えられる」というもので、絶対的な権力をもっていた王の所有権は死者の供物にまで及ぶという、きわめてエジプト的な思想である。カァという霊は、現世にあっても来世にあっても各個人に「生き続けること」を可能にした「活力」であったので、死者への供物はすべてこのカァに捧げられた。

そのような訳で、右文には「それによってオシリス神は死者某のカァにこれこれのものを与える」という意味の文が続いていたはずで、具体的には「死者某」の部分には死者が生前ついたことのあるすべての官職名と死者名とが書かれ、「これこれのもの」の部分には「ビール・パン・布・油・鳥肉・牛肉そのほかすべての良き清きもの」といった常套語が連ねられていたはずである。左文は欠所が多いので、推定をまじえて「王が、大神・アビドスの主であるオシリス神に与える供物」と訳しておきたい。

さてこの遺物そのものの性格であるが、目録には「墓壁断片・エジプト メンフィス付近・古墳出土・カイロの西南」と記されている。カイロに近いメンフィスは古王国時代の都で、その西方には王たちのピラミッドや廷臣たちの無数のマスタバ（箱型墓）からなる広大な墓域が展開されていた。目録の「古墳」とはこのマスタバの1つと考えてよい。この遺物は、恐らくそのマスタバの礼拝室の壁から切り取られたものであって、したがって、時代的には古王国時代に属するものといえよう。ちなみに、エジプトでは、絵や文字のある墓壁の一部が切り取られて、博物館におさめられたり、時には売買の対象とされたことも珍らしくないのである。

┌────────── 左文 ───────────┐ ┌────────── 右文 ───────────┐



エジプト出土 墓壁断片（左右43.5cm・上下5.5cm）

刀の手入れ入門

宮崎隆旨

日本刀の特色が、単に武器として勝れた機能を持つだけにとどまらず、神秘的までに鍛え上げられた峻厳な美しさを備える点にあることは、改めていうまでもない。その実用期を終えた今日も、“鉄と炎と水の芸術”として顧みられるゆえにある。

この研澄まされた美しさを保つには、当然適切な手入れを要する。ことに湿気によって発生する錆は大敵である。この度、当考古学資料室でも本学出身の新進気鋭の現代刀匠河内国平氏の御厚意を得て、その作刀を所蔵することにもなったので、この機会に、初心者のための刀の手入れと取扱いの基本を記しておきたい。

刀の手入れに必要な道具は次のようなものである。

拭紙…奉書紙を用いるが、フランネルや鹿革で代用することもある。

打粉…刀を研ぐ際に出る研ぎ汁の沈澱物を精選して乾かし、布で包んだもの。微細な砥石ともいえる。

油…丁字油や椿油がよいものとされているが、刀剣用油と名付けたものも市販されている。

吉野紙…油を塗るのに用いる。本式には吉野紙を使用するが、初心者にはむしろ脱脂綿の方が無難であろう。

目釘抜…いくつかの形のものが市販されている。以上の道具を用いるが、今日ではこれらのセットも市販されているので、勿論それを求めてもよい。

道具がそろそろと、次の順序で手入れを始める。

- ① 鞘・柄と鍔をはずす。まず目釘抜で柄の目釘を抜いておいて鞘と柄を抜く。柄は、下部を左手で握って刀身を斜めに立て、右掌で左の手首を叩き、柄と茎をゆるめると容易に抜ける。ただしあまり強く手首を叩くと、短刀などは柄から飛び出ることがあるので注意しなくてはならない。柄をはずすと鍔はそのまま抜き取れる。
- ② 拭紙で刀身を拭う。棟側から拭紙の手を添え、鍔元（下）から切先（上）に向けて拭うのが鉄則で、逆にすると指を切る恐れがある。油を塗

る⑥の場合も同様である。なおこの時に拭紙（特に奉書紙）に砂気が含まれていると、かえってヒケと呼ばれる傷がつくことがあるので、よく揉みほぐしておく。

③ 刀身の表裏及び棟に打粉を打つ。

④ ②とは別の拭紙で打粉を拭い取る。

⑤ 上の③と④を数回くり返す。これによって古い油や汚れは取り除かれ、鑑賞にも適した状態となる。拭紙はきれいなものを何枚か用意しておきたい。

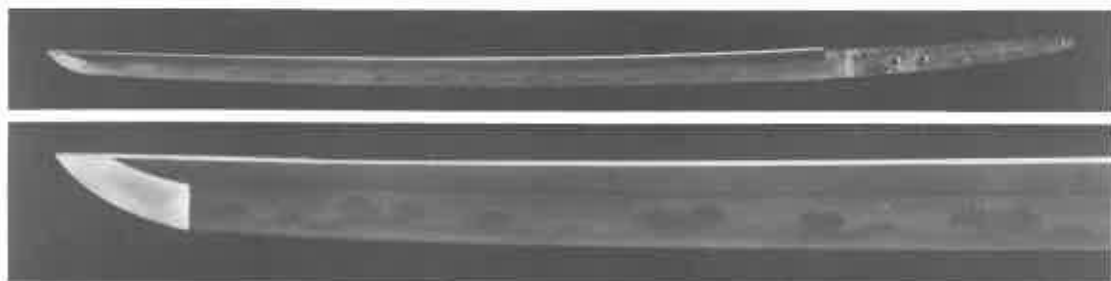
⑥ 刀身に錆や傷がないかを確認め、吉野紙もしくは脱脂綿（或いはガーゼ）に油をしみ込ませて、刀身にむらなく塗る。油は流れ落ちる程多いのも逆に悪く、油で刀身がうっすら白く濁る程度が適量である。また茎にも手に付着したものなど少量の油をすり込んでおくとよい。

⑦ 元のように鍔を付け、柄に茎を入れて目釘を差し、鞘に収める。

以上が手入れの要領であり、落着いて行なえば刀だからといって特別恐るる必要はない。手入れの回数は、普通梅雨時を含めて年に2～3回でよいが、研ぎたての場合は少なくとも週に1～2度必要であろう。

次に他人の刀を拝見する時の、最も基本的な心得について若干触れておく。第一に相手から離れた位置に下がり、拔身を持つての大きな動作は控えるよう心掛ける。相手の顔前に切先を向けたり、打振ってみたりすることは厳に慎むべきである。茎をみるのは持主の承諾を得るのが礼儀で、拔身を相手に渡す場合は、刀を自分の方に向ける。これを受ける場合は一礼して袱紗で柄を持つのが作法であるが袱紗の用意がない時はハンカチで代用してもよからう。素手で握って、新しい白鞘の柄に黒い手形が付いては、作法以前の失態である。

許された紙面も尽きたが、要するに、刀はそれ自体が極めて傷つきやすい上に、時には思わぬ人身事故を起こすこともあるので、取扱いに際しては、一挙一動に細心の注意を払うよう常に心掛けねばならない。



研澄まされた村正の刀

アンデス地帯出土の土器

角 山 幸 洋

アンデス地帯の考古学は、毎年、主としてアメリカの研究者の発掘調査により、編年が書き加えられて、その対応にいとまがないが、単に博物館資料として収蔵されている土器だけの外形的観察に終らずに、その背後にある膨大な研究業績の存することを、はじめに指摘しておきたい。その全体像を知るためには、少し部分的に古くなった感があるが、

Wiley, Gordon W: An Introduction to
American Archaeology, Vol. 2, South
America. Prentice-Hall, Inc., 1966.

をあげておく。そして最近の報告書で代表的なものは、

Lynch, Thomas F: Guitarrero Cave,
Early Man in the Andes. Academic
Press, 1980.

であろう。ここではペルー北部山岳地帯の洞窟遺跡の報告がまとめられている。そして新大陸各地の発掘調査は、American Antiquityの年度末号に記録がある。その一方では民俗的調査も必要で、インカ期の尖底土器と同じ形式の土器も、チチャなどの飲み物容器として使用されているし、ロクロを使用しない土器作りも各地で盛んであり、市場には素焼土器も売られている。

さてこの地帯の出土土器は、戦後、エクアドールのバルディビア出土の縄文痕土器が有名となったが、中央アンデス地帯での代表的形式の土器は、(1)チャビン、(2)モチーカ、(3)ナスカ、(4)ティアワナコ、(5)チムー、(6)チャンカイ、(7)イカ、(8)インカなどに、出土地域・文化によって分類され、さらに細かく分類されている。ただ土器編年も、ペルー国内の研究者よりもアメリカの学界の意向によって決定されることが多い。

土器の発生は、旧大陸と比較して非常に遅れる。バルディビアでは紀元前約2500年をさか上らないし、ペルーでも紀元前1800年ぐらいとされている。多くの文化は山岳・海岸のルートで、北から南へと波及するが、土器と織物の製作技術の波及を対比するならば、土器は織物に比べて約4000年ぐらいの時間的ズレをもって習得されたことになる。この遅れの理由は、ヒョウタンの利用が盛んであり、貯蔵・煮沸などの容器としてつかわれ、土器

を必要としなかったといわれる。

インカ期までの約3000年間の土器製作技術全般を通していえることは、他の地域から新しい技術を取ることなく、一定の段階に止まったままに終ったことである。基本的には、ロクロが存在せず、すべて手づくりで整形したいといわれる。それは全般的な事実ではあるが、最近の報告によると、一部に回転台らしいものを使用していたことが土器の細かい観察から明らかにされている。それに「うわ薬」をつかわず、単に顔料をもって彩色されたとされている。これもうわ薬の使用を高度の技法に位置づけるか、あるいは技法の送状性の問題として取り扱うかに問題があり、彩色ののち焼成するという技法の存在如何とみるならば、習得されていたとみるべきであろう。それはネガティーボ技法といわれるように、ロウ質の顔料で加彩したのち焼成し、陰影で文様をあらわす方法が知られていたからであった。

関大所蔵の関係土器は、旧本山コレクションのものと、久野邦雄氏寄贈のものである。それを編年順序にしたがい、概略な解説を加えるならば次のようになる。

ティアワナコのコップ形人像土器①は、足を投げ出して坐る人形を抽象化したもので、口縁部は、典型的な古典ティアワナコの朝顔形をし、顔面には特徴ある大きな眼をつけている。そして全体的に色調ははげているが、赤褐色の地に黒・白・黄・灰の4色で彩色され、幾何学文様の構成をとっている。

チムーの黒色土器②～⑦は、還元焰で焼かれたのち磨研したもので、主として祭器につかわれた。また実用的な赤褐色の土器や、凹型をつかい「型入れ法」によって量産されたものもあるが、一般にこのチムー期の土器は、大量生産された同型品が多く、よく目のあたりにすることができる。器形の多くは鐙形の取手をつけた注口壺で、動植物・人物・家・舟など生活関係品の形象をとるもの、側面に隆起して描き出したものが多い。

チャンカイの白地黒彩土器⑧・⑨は、荒い粗土で器形をつくり、また、クリーム色の地に黒で波などの幾何文を加彩する。両耳はつり紐を掛けるため、大型の壺は、背負って額上運搬された。

アンデス地帯出土の土器



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧



⑨

昭和55年度調査報告「岡山県津雲貝塚」

昭和55年度研究調査は岡山県笠岡市「津雲貝塚」遺跡その他の調査を実施した。

この遺跡は大正8年より10年にかけて京都大学清野謙次博士らの調査により縄文時代埋装人骨160余体が出土し、縄文時代人研究の基本的遺跡として著名となった。国鉄山陽線笠岡駅の南東3.5キロ南に御獄山の山塊、西に横島の丘陵が、瀬戸内海からさえぎっている小さな平地の北側で、北東の山塊から南西にむかって低くのびた丘陵の末端にできた南面したゆるやかな傾斜地に貝塚は位置する。

縄文中期にはじまり、後期の各型式を出し、晩期に続く津雲貝塚のうちで、口縁部をいちじるしく肥厚させ、摩消縄文や沈線文で、いわゆる縁帯文をつくる津雲A式土器は、後期中ごろの標準的土器型式名として使用されている。また甕棺、土版、人骨に伴出した貝輪、耳飾り、腰飾り、石製丸玉などこの時代の風俗を知る上でも貴重な基礎的資料を提出した。

本学資料室資料の中にも、この貝塚より出土した甕棺、貝輪、土偶、獣骨などの遺物が所蔵されている。

甕棺は大正8年7月大串菊太郎氏（第三回）が発掘されたもので「民族と歴史」第3巻第4号（大正9年3月）に次の如くある。

「…併し此以外に人骨の伴うて出土した物品の中で特に注意すべきものは、生後間もなき乳児を容れる1尺4寸口径の甕、貝輪、腰部に発見せられたる特異の角器及び角（或は骨）製、方形の耳環の如きものがある。就中甕、貝輪及び耳環は後述の如く、奥羽地方と国府との連絡をなす点に於て、特に小生の興味を感ずるものである。」…とあり本学所蔵、甕棺の出土写真（第六号乳児骨格を容れたる甕）が掲載されている。

この甕棺は縄文時代晩期前半のものであり、乳児骨が納められており、条痕を付して粗製の深鉢型土器である。口縁端部に1基の長方形の突起と

縄文土器（小児骨を納めた甕棺）



刻目があり、内側に沈線をつけている。口頸部には内側に幅2cmあまりの粘土帯が、胴部には外側に幅4cm余の粘土帯がある。口縁部径33.2cm、高さ54.5cmである。

この貝輪は大正8年12月長谷部言人氏発掘の第3号人骨の前膊部左右に各1つ装着されていたものといわれ、



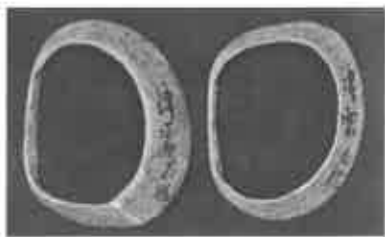
津雲貝塚遺跡

ハマグリ製であり、比較的類例の少ない珍しいものである。左縦径7.1cm、横径5.1cm、右縦7.4cm、横径6.0cmである。貝輪は縄文時代各時期にみられ、埋装人骨の前膊に装着されたまま発見されることも多い。当貝塚における京都大学清野謙次氏調査の66例中、貝輪を着装していたものは9例であり、一対零が3例、一対一が3例、二対零が1例、二対二が1例、七対八の着装が1例発見されている。アカガイ製でほとんど女子が着装していたが、男子も1例発見されている。貝輪の切口により穴の大きさがほぼ一定しているの、一定の年令に達したときに両腕に装着されたとも考えられる。普通の女子の貝輪は左右一対の着装が当然と思われるが、1例のみ左8個、右7個の着装された人骨については、貝輪の他に鹿角製耳飾等も有した、とあることにより、集団の指導者の女性か、あるいは首長の妻という比較的身分の高い女性ではなかったかと推察される。

他に土偶頭部、鹿角等獣骨、貝殻、石鏃、弥生土器等を所蔵しており、現在整理中である。大正2年より始まった宮崎県西都原古墳群発掘、同7年の国府遺跡発掘、8年の津雲貝塚発掘等の一連の発掘は、石器時代人に対する科学的な究明と、日本民族研究に大きな学問的飛躍をもたらした。この学史的にも著名な津雲貝塚の現状は、「国指定史跡津雲貝塚」の標識が建っているのみである。清野謙次博士が発掘された地点も現在二・三軒の家が増築されており、徐々に湮滅の危機にさらされている。大森貝塚を初めとして著名な貝塚遺跡等が跡かたもなく失われているのを見るにつけ、この貝塚もいずれはそんな運命にさらされないと限らぬ。早急に対策を考え、遺跡を保護していただきたいと考える次第である。これが後世の我々の義務でもある。

（網干
角田）

貝 輪





鶏形埴輪

この鶏形埴輪は愛媛県大州市久米町小学校々庭より出土したものといわれ昭和15年9月

27日付重要美術品の指定を受けている。本山コレクションの中でも貴重な資料である。

頭部のみで胴部を欠いており、真直に立った顔は鶏の延び上った姿態をよくとらえている。鶏冠の一部が残っており雌鶏と推定される。古墳より出土する水鳥、馬、犬、猪などの動物埴輪は、人物、鞍など形象埴輪とともに周辺部及び頂上部に何らかの意図をもって配置され、埋められた。恐らく葬送儀礼的意味をもつものと推測されており、死者の復活を願う儀礼などが埴輪に形どられていると思われる。これらの埴輪は専門的な職業集団が存在し、その長が「土師部」ではなかったかと推察される。群馬県藤岡市本郷や東京都太田区下沼部の埴輪窯址の発掘などより、工人集団の存在や、組織、役割などについても解明の糸口が付き、将来の研究に重要な課題を提供しつつある。



馬形埴輪

埴輪は古墳の外表に並べてたてる素焼の土製品の総称であり、埴輪の起源については、

殉死の代用説、墳墓表飾説、墳丘擁護の垣説等があり、最近では吉備地方に見られる特殊土器類にその祖形があり、それが畿内にうけ入れられ、墳墓供献の土器から埴輪への発展があったと考えられている説もある。名称の由来は「日本書紀」垂仁紀にはじめて見える。この馬形埴輪は茨城県北相馬郡守谷町の「将門城跡」より出土したもので、日本人種論変遷史（清野謙次著）に次の如く記されている。埴輪馬の図の刊行せられたるものは、聆涛閣帖以外にこれあるを知らない。破損品ではあるが頭部の馬具の状態が分る良品である。然るに標有梅の図に将門城跡より出づる古代土馬としてこれと同一物があつて葦葭堂蔵としてある…思うに歿後この遺物が江戸梅園の手に帰し、そして神田孝平の藏品となり、本山彦一翁へと受け継がれたものと思われ、出土地が判明したのでここに紹介する。

資料紹介

石鞆上半部

これは石鞆上半部であり、石人頭部と同様福岡県八女郡吉田村の岩戸山古墳より出土したもので、石人と同時に昭和15年重要美術品に認定された資料である。鞆とは矢を入れて背におう容器のことで、これを石で模造している。「筑後国風土記」にはこの古墳について、石人石盾各60枚を交互にならべ周囲をとりまいておるとか、種々の石人を配置し、役人がたっているまえに盗人が裸で地に伏し、そばに盗んだ猪がおかれていた光景があるなどと記している。現在では荒れはてする由もない。この岩戸山古墳を最後に石人石馬を墳墓表飾とする風は突如として消えていくことは異常である。これ以後の古墳には石室内部に五色を駆使して壁画に鞆、刀、小人物が描かれたり浮彫されるようになり、装飾古墳へと続くものと思われる。また民俗信仰により、この石人、石鞆の粉を飲むと健康になると伝えがあり、石人の目鼻など欠けているのもこの為であろうか。

石人頭部

わが国の古墳の墳丘上の表飾として用いられた石造彫刻の一つである。人物像、馬像の他に鶏、甲冑、盾、鞍、刀などの器物をあらわしたものもある。福岡県南部から熊本県北部と大分県東部にわたって発見されている。阿蘇溶結凝灰岩と呼ばれる単色の加工しやすい岩石で造られており、赤青の彩色を加えたものもある。本資料は昭和15年9月27日付文部省より本山彦一殿とし、貴殿所有ノ左ノ物件本日昭和8年法律第43号重要美術品等の保存ニ関スル第2條ノ規定ニ依リ認定セラレタリ右通知ス、とあり、一、石人頭部一個福岡県八女郡吉田村出土、と記され昭和15年に重要美術品として認定を受けた資料である。岩戸山古墳出土のものであり、磐井の墓と称されている場所である。この古墳は石人石馬が製作された最盛期であり、二段築成の上に各種の石人石馬その他が豪華に立てめぐらされていたものと想定される。

資料紹介



◆ 資料貸出利用状況

- 55.11 青龍刀形石器（出土地不詳） 1点
小学館「国際版原色図解大事典」第6巻「日本の歴史」掲載
- 56.1 石枕（伝天理市柳本町景行陵出土） 1点
暁教育図書「日本発見」掲載
- 56.1 块状耳飾（藤井寺市国府遺跡出土） 1点
講談社 カラー科学大図鑑シリーズ「大むかしのくらし」掲載
- 56.2 漢式鏡（鍋塚古墳） 他14点
東大阪市立郷土博物館 「河内の古墳をたずねて展」へ

◆ 閲覧人員

年度	51	52	53	54	55
人数	307	300	243	372	597

◆ 資料所蔵点数

昭和56年3月末	取得価格
4,813点	15,631,650円

（関西大学固定資産対象のもの）

（註）同一種類のもは数百点でも一括1点として査定しているものもある。

◆ 寄贈資料（一部購入）

- ◇軍刀 一振 北岡栄一氏（本学財務局長）より寄贈を受けた。
銘 「関住兼松一則」 長さ 二尺三寸三分五厘、反五分



- ◇瓦経 6点（推定 伊勢小町塚経塚）

江口治郎氏より寄贈を受けた。瓦経は平安時代末期の約100年間に限り製作されたもので、瓦製の平板に粘土が乾かないうちに経文を陰刻し、乾かして焼き上げたもので経塚に埋納されたものである（3ページ参照）



- ◇刀剣 一振 表銘 於吉野国平造之 裏銘 昭和五十五年春 吉日
長さ 74.3センチ 反り 1.8センチメートル

河内道雄氏（本学法学部出身）に製作していただいたものである。河内氏は人間国宝宮入昭平氏の直弟子にして、約10年前より郷里奈良県東吉野村にて独立して刀剣の製作をされている。また毎日新聞大賞など数々の大賞を受けられており、関西の中堅刀匠として将来が嘱望されている。



編集後記

今回も各先生方へご無理をお願いし原稿をいただいた。ここに感謝申し上げる。

本学考古学資料室には学史的にも著名な資料が多く含まれており、東京人類学会初代会長となった「神田孝平翁」の資料は、翁自身でも淡崖の筆名で人類学会雑誌に多数紹介されているが、未発表のものも多数あり、徐々

に紹介していきたい。また、本山彦一翁発掘の大阪府藤井寺市国府遺跡の縄文・弥生資料は質量ともに一級資料であり、学術報告書として発行すべく整理研究中である。また、本学に博物館学課程が昭和36年に開講されて20周年になるので、これを記念して研究紀要の発行も計画しており、年内刊行を目指して努力しておりますので、関係各位のご協力をお願いいたします。

（角田芳昭）

関西大学考古学等資料室彙報

No. 3 昭和56年5月31日発行
関西大学考古学等資料室 発行
（株）原多成文社 印刷